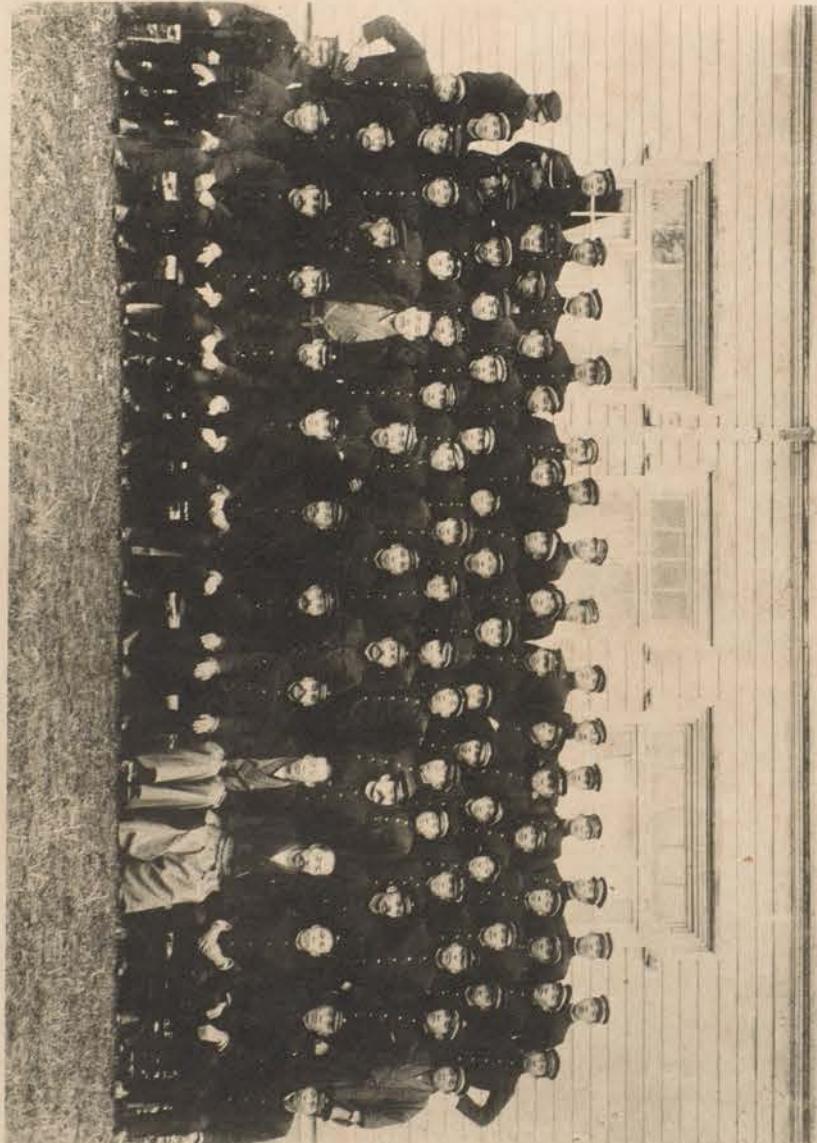


大正三年三月

校友會雜誌

第十九號 第二卷

滋賀縣立彦根中學校 校友會



大正三甲辰ノ日卒業ハハ牛乳工學専攻

校友會雜誌 第二卷第十九號

講演

京都同志社大學總長講演

原田博士

當地に出ました序に御校を參觀し、且つ此の時間を與へられまして、諸君に御話をなし得るのは誠に満足であります。

今日御話したい事は、先日朝鮮から滿洲の方へ視察に行つた其當時、支那印度に於て氣付いた事を再び思ひ出したから、それを御話したいと思ふのです。それは『國民の性格と建築の關係』と云ふ事である。申す迄もなく國あればその國民には他國民と違つた性格がある。其の性格を表はす所の物は何であるかと云ふに、或ひは之を歴史によりて知り、或ひは現在國民の様々の事業、政治方面に於て見る事が出來ます。けれども最も早く且つ最も著しく表はす者は一は國民の服裝もう一つは建築である。

服装から云へば各國皆違つてゐる日本には日本、支那には支那の風あり、英米其他獨佛に至る迄皆異なつてゐて、一見直ちに何處の人かと云ふ事が分る。處が今日では、服装に關しては東洋と西洋との様子が或る點迄一致して參りまして、殆んど見別がつかない様になつて來ました。

譬へば御列席の先生達も諸君も洋服を着けて居られまして英國イートン中學の服装と同様である。それで顔を見れば判るが、服装を見れば何れの者であるか知れないのです。昔はイギリス人とアメリカ人との間に服装の相違があつたが、今では分別がつかないので此の世界主義の一として立たんとして居ます。

然し乍ら東洋に於ては未だ朝鮮人は大多數は一見朝鮮人たる事を知り支那人は大多數は是を支那人であると想像がつくのである。

次に建築は皆違つて居るのである。建築程國民の趣味、富の程度、性格を明かにするものは他にないのであります。朝鮮に行き其の建築を見れば、朝鮮人の富の程度の低い事、其文明の退歩した事が一目瞭然である。朝鮮といへば昔我が國のお師匠國であつたのですが、試みに馬關を出で釜山に参りまするに、釜山は日本人が澤山で、日本内地と何等變つた事はない様であるが、一步を市外草梁停車場に進めたならば、朝鮮人の家屋を以て、満たされて居りまして、彼等の家屋を見るに、實に見慘な者で瓦葺屋根とては一二

軒ある計り。之が役所なのであります。而して他は悉く草葺であります。然も四疊半又は六疊の大さに止まり、其中に五六人の家族が住んで居るので、先づ極端に云へば豚小屋の様なものであります。

その家をのぞくに、何の裝飾もなく單純なものである。其の多くは白い直衣の様な着物を着て、例の長い煙管を手にして市街を「我不關焉」の体にて徘徊して居る。

而して其の市街の建築はと云ふに皆悉く同一であります。只大小のあるのみである。喻へば京城には南に南大門、北に北大門と云ふ風に、東西四方に四大門があるが、是等のスタイルは形に大小あるのみの一語を以て知らるゝのであつて、平壤に於ても前と同様其他役所の建て方迄同様であります。

支那へ参りますと城門の造り方は少し變つて居るも、是又同様であつて朝鮮人よりも、生活狀態の勝れて居る事は争ふ可からざる事實ではあるが、一市を見れば他の市を想像し得べく、一屋を見れば他を推測し得ると云ふ筆法なのであります。

是は抑も何であるか、是國民が舊慣を守つて、敢へて變りないと云ふ性格を表はせるのである。

然らば日本は如何と見るに、明治以後はさて置き、其以前を考へて見れば、支那、朝鮮と變りがない。私は京都に住んで居るが、今から數年前、電車の出來なかつた時分烏丸通りを通つて見るに、所謂千篇一律只家屋に大小の差がある許り、試みに寺々に參詣して見るに、其の門と云ひ、本堂と云ひ、屋根の様子と云ひ、古代の摸範建築物の遺物が誠に同じ模型によつて建てられたので只大小の差あるのみ。

例へば彦根のお城を見て、立派に保存せられてあるのを愉快に感するのですが、此城に二三度も登つて見ますと、日本の城の作り方等略々了解せられます。則ち先づ大手丸、一の丸、二の丸等と云つて、次に天主閣がある、城の大きくなるに従つて、第二天主閣、第三天主閣等と畧々一定して日本全國北は青森から南鹿兒島に到る迄澤山の城はあるが、二三を見れば他は推して知るべしと云ふ事を表示して居る。

所が西洋の文明の様子は是等と雲泥の差がある。

第一に西洋の人々は、同じ物は出来るだけ是を避けると云ふ、各人は獨特の意匠を發揮する事を努める。則ちある家を造れば、隣人は之と異なつた新式の家を建てると云ふ風に、試みに米國桑港に上陸するに、一軒毎に風變りの家を見出すであらう。一方は勤めてイシティーションを主とし、他は勉めてオボジットせしむると云ふ根本に於て、既に相反して居るのである。

富の程度を見る時は更によく建築上に於て、長く堅牢に堪ゆると云ふ性格を表はして、錢を厭ふてはない話は大きいが、假りに英米はアングロサクソン人種であるから、一纏にして彼等と日本とを比較して、縮めて云へば、日本人の建築はよく美を愛し、光を愛する點を表示して居る事は明かであります。

先年私の知人の某アメリカ婦人が日本の内地をあちこちと觀光して歩き、歸米してから或る雑誌に其の紀行文を寄せて書かれた事がある。例へば旅行先の宿屋の窓を開ける、丸窓の内に竹を渡した所等又は欄間の彫刻等の趣味に豊富である事を、一々畫に寫し取つて載せたと云ふ。ドンナ小さな家でも、庭前が

あり燈籠があり、泉水があり、乃至は掛物あり、額あり、花瓶あり……」で、美術的思想に富んで居ると云ふて居るが、然し堅牢と云ふ點はない。それで我國は二千年以來の古い國、神武帝が建國せられてからでも、既に二千五百七十三年と云ふ國であるのに、古の遺物が比較的少ない。則ちルーラインなる者が残つて居る事が稀である。

然るに獨逸のライン河を溯て見ると、彼所此所に五百年、三百年と經つた所謂苔蒸したる文明の遺物があつて昔を偲ばしむるのである。是等は堅牢を主としたからであつて、一寸京都等が一千年の舊都であり乍ら、西洋人にしかく思はしむるに難いのは堅牢を無視したる爲め、現今の建築物が多く、古い物は見る影も少いからである。

但し、近世に至つてその様子を改むる様になつて參りました。先にも申した如く、諸君は洋服を着て靴を穿いて居られるが、家に歸れば多くは和服とお着換へでせう。

則ち日本は過渡の時代に居るのである。建築に就きましても、現に御校も校舎等も西洋風である。譬へば門は洋風で、之に入れば玄關が日本風、書齋、客室が西洋的で椅子やテーブルがあり、更に進んで座敷が日本風と云ふ風に、丁度頭に帽子、足に下駄と云ふ形なので、畢竟二重の生活をやつて居るのである。

私は今日西洋と日本との建築の互の長短、或は性格の特質論を説く者ではないが、結局是は國民の性格が建築に表現せらるゝと云ふ迄である。

例へばその人の性格によつて、智恵の有る人はその建築上智恵のあるのが表はれ、富裕な人は又建築が富の状態を表示し、其他永久と云ふ事を念頭に置く人、趣味を有する人等自ら建築が一々物語りして居る事は明かである。

それで昔から、人間の品性を建築に喻へてキヤラクター・ビルディングと云つて居ますが、聖書に「汝等砂ノ上ニ家ヲ建ツル勿レ」家を建つるには岩の上に建つべしと云つてあります。我が品性がつまらない物ならば、則ち砂の上に建てた家であつて、社會の風波に抗する事が出来ず、波の上に浮んで遂に顛覆せなくてはなりません。

諸君、我々は云はゞ大工である。而して我々には信念と云ふ。岩の上に於ての堅固なる家を、建てつゝあるのであります。我々は人の助けを待たず。自ら大工として建築せねばなりませんから、よく發揮せねばならぬのです。

此頃セシル・ローデ氏は南アフリカにローデシア國を建てた人で有名な人物ですが、彼がオツクス・フォード大學に遊んで居た時、肺炎に罹り醫師から須らく暖國に至らずんば、永く生命を保つ事能はず、と宣告せられ、生命の長短は天命なれば我如何どもせず。只死して後悔無からん事を期して、自ら南アフリカに至り、斯くの如くして建國一、醫師の數ヶ月と云つた命を永らへて、六十五歳と云ふ長命をし數億の財産を造つて終生妻をもめどらず、アンゴロサクソン人の中の人物に對するローデ獎學金に充て、彼等をオツク

ス・フォード、ケンブリッヂ大學に遊學せしむるが爲に投資したと云ふ。彼ローデが後悔をせない様にと、一心に労動して、全心、全力を竭した所を讀む度に、私は愉快に感ずるのであります。誠に彼が死に瀕した時の決心こそ、所謂、岩の上に家を建てたと云ふ事なのであります。

私は先刻英國イートン・中學の話を校長さんと致しましたが、現今、英國四つの有名なる中學の一で、その講堂に人物のタブレットやスタチュー等が一つと掛けてあります。その中學の卒業生の中から出たる世界的の人物、名を竹帛に垂れたる人々等の油繪等の列んで居る所を望む。インスピレーションは打たれるのであります。彼等の性格は一に堅き礎の上に教育せられたのである。

諸君は學校を出られた後、各々其趣味に従つて、家を建てられるであらう。又、或ひは私の様に一生、他人の建てた家に、借屋住いをする人もありませう。然し乍ら、是等は目に見わたる、所謂外觀上の建築である。精神上の建築は、只今から礎をせねばなりません。而してその信念の上に立派なる建築をせられん事を希ぶ。此中學時代を過逸して、後になつて考へ様との了見ならば、實に將來危い者である。

今日、今時から天に愧ぢず、人に愧ぢずと云ふ立派なる信念の中に建築あらん事を、重ね／＼希望致します。（終り）

論 説

我が國民の不滅的中心思想に就て

第五學年 竹内勝三

世界の歴史を繙いて、つらゝ人間の希望を考へて見るに、新學說或は新思想を述ぶる爲に、其國固有の思想と學說とを悉く棄て、其述べんとする新しき思想、學說の上に一國の人心を築き上げて見たいと云ふ希望が看えて居る。其時に際して、新舊思想の大衝突と一國の人心の大混亂とを現出して、固有の思想學說の變革と共に必ず國家の衰亡を來すが、是れ實に人間の希望から起るのであつて、然して其れが世界の通弊である。一度此の魔風に誘はるると其人心の定めなきこと恰も水上に浮ぶ萍の如く、吹きくる風の隨々東西に彷徨し、南北に流轉して、止め處なく、遣る瀬がない是れ全体何故なるか。

我が日本國民性を見るに、物換り星移りて、時代變遷を重ねる中には、他邦の文物異方の風俗、雜然たる新思想や新學說ごとく輸入し来るも。國民の君國に對する中心思想は、之れが爲に全然變革する事はない。是れ如何なる原因であるかと云へば、我が國民は、先天的皇室に對する確乎不拔の根本的中心思想の凜乎として存在するからである。顧みれば約三百年以前に、徳川朝府が船を擋いて、外航を禁じ、港を鎖

して、通商を廢せられし以來。我が國民は豊草原瑞穂國と云ふ、武陵桃源の中に、夢濃かに眠つて居た時代の日本と、今日の我が國とは、雲泥の違ひにして交通機關の開けし以來、大平洋を航することは、近江の湖水を渡るが如く。西洋諸國に行くは、躊躇の如く感せらるゝに至つたのである。故に西洋諸國の出来事は、忽ち我が國に影響するものである。然は云へ、西洋と東洋とは、其關係が中々遠いのである。然るに我が國と一葦帶水を隔てたる支那は、唇齒の關係と云ふても差支ない。されば支那の盛衰興亡は、我が帝國の物質上に精神上に大影響を來すものである。

支那は衰へたりと雖も、七十萬方里の土地を有し。五億萬の民族が有る事なれば、依然として、有望なりと樂觀視していたが、急に大病になつて、有ゆる孫とか黃とか袁とか云ふ名醫國手の品を換へ法を求めて手を盡して居つたが、最早や恢復は覺束ない、云はば致命症に罹つたのである。然らば如何にして之を救ふかと云ふは、今日朝野の經世家政事家も、心を種々に碎きつゝある様である。

何れ程考へても自ら治むる能はざるものは、人之を治むるより外に道は無い。然らば此場合に於て何れの國が最も骨を折り世話をすべき哉と云ふに、余の思ふは近國が同情の誠を以て盡して遣らねばならぬと信ずる。

然らば我が國と支那とは、東洋の天地を同うし、青史に依れば、太古より、淺からぬ關係がある。故に上は神代より下は人皇の代に至るまで、往來交通頻繁にして聖人の道は、固より文物典章文字等、今に至る

まで取つて以つて我が皇道を裨補して居る。されば此の舊交の情としても支那を指導し、立派に獨立を保つ様にするは我が國の任務である。

乍併今日は國際關係があつて、事情は上の如くにもあれ、日本が餘り深く立ち入り過ぎて、其獨立に全力を盡さんとすれば、歐米列國は之を黙視せざるのみならず。大に嫉視して、却て東洋の平和と、外交の圓満とを害する様になるが、現今歐米列國の支那に對する態度如何にと云ふに何等か他に潜みたる意義があるのではあるまい。

果して然りとせば支那は四分五裂し漸々亡國に瀕せざるを得ないと思ふ。隣保なる支那の亡國は日本帝國的一大不幸で謂ゆる、唇亡びて齒寒しの感に堪へぬ次第である。

是に於てか我大日本帝國は、君臣の大義名分が、天壤無窮に定りて萬世一系皇室を戴き奉る事が、國体の根柢となつて居る故に、皇室の爲には何時にも、身命を捧げ奉ると云ふ確信が先天的國民性となつて居るのである。

去れば、西洋より澎湃として入り来る、異主義新思潮も、此國体に合ふ者は之を探り、有害なる者は之を捨つると云ふ、國體本位皇室中心の思想が先祖の始めより、子孫に至るまで、國民の血管を流れ流れて傳つてゐる。之を歴史に徴するに、我が國も戰國時代は隨分國家が混亂した事もあるが、其度毎に、皇室中心としての志士に依りて、人心を革新して居るから、日本人の頭脳には、皇室と云ふ事は忘れ様として忘れら

れぬので、若し忘れたんか、亂臣賊徒である。彼の後の世まで不忠不義の名を背いし、北條義時が三上皇を流し仲宗間帝を廢し奉りしも事足らず。其子泰時に京都の御所を討つべしと命令せし時、泰時が父義時に曰く「父の命に背くにはおらねど天子自ら御出陣あらば如何にすべき」と問ひしに義時曰く「天子の出陣とあらば兜を脱いて降参せよ」と云へり、是れ程の大逆無道の行をなす身の、心の奥には尙根本皇室を忘れぬ事が見えてゐる。以上は古き昔の話なるも大正の今日あらしむる。近世の實談として、抑も大正の今日あるは、畢竟幕府を仆して萬世一系の聖天子を奉戴せんと云ふ皇室中心の至誠が、天下到る處に活動し來つた。天歩艱難繫獄身、誠心豈莫耻忠臣と云ひし志士、西郷南洲翁や、「身はたゞひ武藏の墅邊に消ゆるとも留め置かまし大和魂」と云ふて消えし吉田松陰或は「君が世を思ふ心の一筋に我身ありとは思はざりけり」と抱石の拷問に掛りて死せし梅田雲濱の如き、其他幾多の忠節の志士が皇室中心として幕府の暴政に、血を流し、骨を碎き、以て、此維新的新天地を開拓して、遂に國民に「君が代は千代に八千代に」と謳はする様にしたのである。そこで我國民性には、時代によつて盛衰汚隆は有れ雖も要するに皇室を忘るゝ事が出來ぬ深遠なる原因が、存すると思ふべきである。

併し此の國民性と云ふは、獨り日本のみならず、何れの國も其國相應の國民性は有するもので夫れは如何なる時に顯るかと云へば、何れも其國の安危存亡の時に能く見らるゝのである、茲に西洋と、日本との國民性を對照して見ると中々趣味がある。彼の米國が英國の非常なる重斂と苛政とを受けて、最も困憊に陥

りし時「バトリックヘンリー」が如何に云へる「我れに自由を與へよ然らば死を與へよ」と絶叫した
とある。此言によると、西洋の思想の中心點は國家よりも、自由思想が如何に重せらるゝかを分る。次に
支那の國民性は如何にと云へば、其代表的人物として、出師の表を讀むて泣かざるものは、忠臣に非ざる
なりと評せられし、諸葛孔明を引き出さん、孔明は漢の將に亡びんとする時に「鞠^{カウ}躬^{ヲシテ}盡^{シテ}力^{シテ}後^シ己^{マニ}」と云
へり、死は人生の最後の手段なれば、死ぬまでやると云ふのであるから、支那の思想は、西洋のそれに比
較して見れば、憂國の情が一段と進んで居る。

抑日本國民性を見るに、忠臣正義の士となりて、各方面に現れて居るが、代表的忠臣の士として擧げんに
女「身の爲めに君を思ふは二心君のためには身をも思はず」とて、我身を顧みず延元々年五月廿三日刀折
れ矢盡きて湊川の草の葉の露と消え玉ひて、歌に詠せられ、詩に頌せられ、歴史に刻まれて、長く國民の
胸中に生きつゝある、楠正成卿を推さむとす。卿は最後に「七度人間に生れて國賊を滅さん」と云ひ、從
容怡然として刃に死す、何ぞ壯なるや。吉田松陰は、楠公豈に七生のならんや初より未だ死せざるなり。是
れより其後楠公の爲に興起せざる、忠孝節義の人なし、即ち楠公の後、楠公を生ずるもの、固より計り數
ふ可からざるなり、何ぞ獨り七生のみならむやと云へり流石に楠公の知己である。

以上論せし、西洋支那日本に於ける國民性の差異を能く観味して、我が日本魂の一一番居心の善い處に、豫
て安心決定して置かむとするは、急務である。

現今時代精神の趨く處、人心水よりも淡く、人情紙よりも薄く、物質主義は、日日に發達し、人心惟れ危
く、道心惟れ微にして只名利權勢を遁ひ廻り、其の結果、皇室を忘れて個人を思ひ、國体を無視して、物
質を重んずる時代に於て、勳功世界に輝き、忠誠一世に高く「うつし世を神さりましゝ大君のみあとした
いて我れは行くなり」と書き遣して、明治天皇に殉し奉られし、乃木將軍と、又婦道地を拂ひ、虛榮
風靡し、貞操節義の何たるを知らざる現代に於て「出てましてかへります日のなしどきくけふのみゆきに
逢ふぞ悲しき」と歌ひて、悲壯なる、自刃を遂げ婦道の龜鑑と、仰かれたる夫婦は、神國に生れたるもの
は、頑夫と雖も、懦夫と雖も之に感激せぬ者はあるまいと思ふ。看よ乃木大將の死は歐米列強に對して、
日本國民性の精神を一層深刻に感せしめたる事を。况や我國民に於てをや。されば余は右の俗論者や、異
宗教者も深夜人定まつて、後心靜に、胸に手を當て、現今の時弊を考へ、將軍の自刃を追想せば、慚死の
感に堪へぬ者あらうと思ふ。

然らば日本の現社會に於て、尤も必要なる物は、何か、科學、哲學、文學、美術其他數へ來れば、幾多あ
るべし。併ながら物質萬能主義の現代には、予が謂ゆる日本國民の不滅的中心思想を代表し義は泰山より
重く、命は鴻毛よりも軽く、生を棄てゝ義を取る底の實行的義人、即ち乃木將軍の如き偉人が何より必要
なりと思ふ。然らば、斯る實行的義人は何に依つて得られ、養成すべきか、曰く科學に非す哲學に非す文
學美術では、無論ないのである。斯る皮相なる學術技藝を、超越したる、奥深き精神教育に據らねばなら

む、其精神的教育とは、何ぞや宗教を置いて他に求む可からず、宗教も種々あるが、如何なる宗教に依るべきかと云ふに、我が國家の大精神たる勤王の大義に適ひ、吾が國民性に合体する宗教に依らねばならむと予は悟つたのである。然らば何宗教なるかと、云ふは未だ予等の見解でないから論するに足らむが、要するに國民の中心思想として精神を養ひ、智識を研き、西洋の新學說も、新思潮も、他山の石として、之を迎へ、我れに益あらば、打て一丸とし、我れに害あらば碎いて微塵にして、彼れに醉はず、詔はず、して我國民の精華を益々發揮し、皇室に對する、日本國民の不滅的中心思想を國民全体の腦裏に貫徹せしめねばならむ。是れ現代の急務、即ち大正維新の一大事業として道を奉する者の爲さねばならぬ天職なりと、信するのである。

人世に於ける最大勢力は品性なり

第五學年 熊 谷 讓

人世に於ける最大勢力は品性に如くもの他になからん。實に品性の人に於けるは、猶生命の身に於けるが如く人の肉体的生活は生命に依りて生き、人の精神的生活は品性によりて活くべし。

凡そ政治家宗教家軍人商人其他如何なるを種類の人たるを問はず、若し品性にして缺くる處あらんには、如

何でか其の實を全うして眞善美を顯はすを得べき。

蓋し之れなくんば成功は期し難かるべければなり。

品性の優劣如何はたゞに己れ一箇人の浮沈に關するのみならず、軽ては社會の惡弊をきたし、進んでは國家の興亡に關する事多大なるべし。

又品性下劣たゞ個人主義を以て基礎とし、眼に國家なく、惱裡に君主なき守錢奴支那人を見よ。

古昔は大賢聖人續々出で、世界文明の中心となるも、今や世界列強の爲めに領土は蹂躪せられ、或は國家顛覆して可惜悲泣するもの數ふべからず。

其他羅馬にまれ、埃及にまれ、土耳古にまれ、古往の歴史を繙き或は廢墟古蹟を吊はゞ、誰か一掬の涙に酸鼻せざるものなからん。誰か其の依つて來る原因を極めて轉々青衫を濕さゝるものなからん。

實に品性高潔の士よりなれる國家は隆盛なるべく、國家として之より以上の幸福なるべく、之より以上の慰安なるべし。

故に人世に於ては學識よりも、才能よりも、品性ほど肝要なるものはなからべし。實に品性は人世に於ける最大勢力なり。然るに文運の進むにつれて、却つて品性次第に惰落し、世の惡風潮浸々として進むは、慨嘆の至りならずや。

夫れ人如何に非凡の學識を有し、絶代の才能を蓄ふるも、之が活動を助くる品性乏しからんには、その學

識才能は何の用をかなさん。

されば我國人にして品性の修養を怠らんか、明治聖代の偉業の維持も、大正聖代の發展も期すべからざるべし。

我等は之に鑑み、そが修養につとめ、堅實の人とならん事をはからざるべからず。されど品性は決して一

朝一夕にして修養し得べきものに非す、幼より積む習慣に基きて養ふを得べし。假令其の人の稟性如何に善美なるも、自修積德習慣性とせずんば、畏敬すべき英傑君子とはなる事能はざるべし。

蓋し稟性の善美なるも以て其の人物の輕重を定評し、或は其の人將來の如何をトするに足らざればなり。されば吾人は、品性は人世に於ける最大勢力なるを解し、近く自ら之を身に具備するにつとめ、ベストを盡して改善發達せしむる事に心掛くべし。

品性の修養に關しては、其の方法種々ありと雖も、就中勤勉節操勇氣忍耐克己果斷正義の諸徳を養ふは最も缺くべからざるものなり。

泥を食ふ蚯蚓は泥を吐き、濁水を呑む蛙は濁水を吐く、精神的に品性修養につとめたるの士は、また高潔優美的誠を吐くべし。

前途有爲の我等青年は、宜しく意を茲に致し、高尚なる理想を有し、堅實なる所信を抱き、岐路に迷はず百難に辟易せず、己が運命は自ら開拓して邪を排し正を取り以て自彊息まさるの覺悟を有すべし。

然らば眞の價値ある人たるべく且つ品性具備するの人たるべし。成功は期せずしてなるべく眞の活動は自らなすを得べし。所謂大丈夫にして、天下の正位に居り天下の廣道に立ち、俯仰天地に愧ぢざるの士たるべし。

家庭に對する義務

第三學年級 佐々木正樹

家集りて國を爲すものなれば、家は國家の源なり。若し家庭が克く規則立ち勤勉にして和氣雰然たれば、必ず一村の良風をなし、平和の空氣満ち、繁榮を來す。を以て社會に及ぼし、遂に國家を富強ならしむ。「ビスマルク」英國の「ボーム」は勤勉にして、規則正しき中に、和樂あり。實に種々の美德の具はれることを表せるが、我が獨逸には斯る文字なしと、嘆息せり。誠に此の言の如し。斯様なる家庭を有する國家は、自ら富強となるは當然なり。世の實業家よく勤勉力行すと雖も、既に巨萬の產を積むや、家庭を紊亂するもの多し。斯の如く家庭を治めざるものを紳士と云ふ可きか。彼等には其の資格更になし。彼等の言は空論のみ、其の實行は疊みの上の水練のみ何の効かある可き。抑、家庭教育は社會に如何なる影響を及ぼすかに及ばず。

二三の例を擧げて以て之を語らむ。源信僧都早く父を喪ひしかば、母は千菊丸（源信幼名）を比叡山にて修養せしめ、之に訓へて曰く。「汝成業して歸國し、父を吊ひ、尙須らく吾に安心の大道を得しむ可し。」と是より學問、德行並びに進歩し、秀才の名高く、宇内の人々之を欽仰せしかば、一日皇居に召され聖典を講じ、天皇を始め奉り群臣の感賞を受け、深き賞に與り、芳名噴々たりしかば、母に告げんとし賞品に書面を添へ、母親の許に贈れり。母潛然落涙、返書回答して「世人の賞讃を喜ぶが如き者は前途の成業覺束なし。」と切に之を諒め遣したれば、僧都は訓誡を厚く心肝に銘し、腦底に刻せしかば、遂に高僧となれり之れ日本に於ける七高僧の一人なり。

猶修業日夜黽勉して懈らすありしが、一夜月光清朗、滿天拭ふが如き夜、母を懷ひて歸心矢の如くなりしかば、有明の月を待ちしに、偶然母の老病を知らす使者に逢ひ、急ぎ伴はれて歸郷し、母の傍に在りて、安心の大道を説けり。故に母をして欣然として、眠るが如く瞑せしむるを得たり。

近江聖人は、貧困なる家に生れ、幼にして父に離れしかば、母は藤太郎（先生少時）を保養する能はず。之を大洲の叔父に依頼し、袂別の時、訓へて曰く「汝一度我家を出でたる上は、名聲宇内に發揚し、以て偉人と成るに非ずんば、決して再び對面を許さず。汝宜しく人一倍の勉強をすべし。必ず中江の家名を汚辱すべからず。寤寐此の事を忘る可からず」と吳々云ひ聞しかば、子供乍ら涙を抑へて曰く「必ず英傑となり、」とき父、及び存命の母に満足を與ふるに非ずんば歸國は致さず」と藤太郎斯の戒めを確く念頭に掛け

て忘れず。終日勤勉解らざりしが、常に郷里の母を懷ひて歌ます。偶々母よりの書に接したれば、書中に轍にて困却の由ありしかば、僕をして妙藥を購ひ、遙に遠路を辿り、淋しき旅寢、重ねつゝ歸りしが、母之を見て、一度は驚愕の餘り默然たりしが、暫らくありて、涕涙して、之を呵責し、黄昏なれど一刻の暇をも與へず、伊豫へと引還さしめたり。之より死にもの狂ひに勉勵し、遂に學德兼備せる英傑となれり。然れば諸藩、多く先生を招きしに、先生二君に仕へすと、大洲藩を後にし歸省し、孝を盡し、多くの門弟を教誨し、近郷の者に善行を訓へしかば、夜も戸を鎔さず、道に落ちたるを拾はす、人々先生を稱して、近江聖人と云へり。斯る俊傑となりしも、此の母なかりせば、藤樹の譽、世に高く知らるゝ時はなかるべし。扱てもゆかしきは母の恩恵なり。

南朝の忠臣、楠正成、足利尊氏の新に勢を得、大舉して東犯するや、之を攝津の兵庫に挑戦せんとし、櫻井驛にて其の子正行に、遺訓して曰く「吾己に死を覺悟す、汝幼少と雖も、猶ほ能く吾が言を記せよ。今日之役は天下の安危の決する所、意ふに復たと汝を見ざらん。吾戰死せば天下再び賊軍の蹂躪する所となるん、汝國家の爲め自愛し、以て父業を繼ぐべし。須らく誠忠を致し、身を以て國に殉す可し」と説きて之を河内に遣り歸しぬ。正行涙を拭ひて、母の許に歸り、之を語り告げぬ。既にして、父は武季と耦死し其のみしるしは、送られしかば、一族郎等、相集りて佛事供養を營み居りしに、正行七首を提げ、忽然、佛間に到りしかば、母尾行し、覗ふに、父に從ひ自刃せんする様なりしかば、母は懲るに、父の遺言を述

べ諭しぬ、遂に人となりて、一死以て、國に報じ、忠孝兩全の人となり、千古未曾有の龜鑑となれり。是れ實に家庭の教育優れたりしが故なり。

支那の孟子は亞聖と云はるゝ人なるが、母仇氏は其の教育には、頗る心を用ひ、住所を替ふること再三に及び、最後に學校の近傍に移しゝが、朝夕學問禮義を習ふ態ありしかば、母場所を得たりと喜べり。長じて京師に遊學せしが、孟子桑梓の母を慕ひて、學を中途に廢し、歸省せり。母機を織りしが、問ひて曰く「汝の學、進めりや」と軻曰く「舊の如し」と母直ちに刀を以て、機の絲を截ち曰く「汝半途にして、學を廢するは、吾斯の機を截切するが若し」と叱責し、懇ろに誠めしかば、孟子感奮興起、以て學を修め智德を研き、戰國爭奪の世に在りても、専ら聖人の道を講じたり。孝經に曰く「身を立て道を行ひ、名を後世に揚げ、以て父母をあらはすは、孝の終りなり」と孟子の如きは斯る一人なり。

以上記載せる例の如く、英傑、賢人となり、國家社會に貢献したる者も、其の原因を考ふれば家庭教育の結果の表れたるものなり。(丁)

少年の前途

第三學年 居原由太郎

巍々たる嶮山、重疊前に横はり、千仞の絶壁竦立左右に聳え、茫々たる蒼海山の如き波濤を漲らし、慘憺

たる風雨天地を蔽ふ。而して之を越へ、之を航し、之を凌ぎ、之を衝く者は是れ唯少年なるか。嗚呼少年の前途、少年の行路豈多事ならずや。亦困難ならずや。然りど雖も決して失望する勿れ、落膽する勿れ、苦は之れ樂の種なれば也。

固より巍峨たる山嶽、蕭索たる風雨好む所に非ずと雖も、之を凌がざれば前途の寶を得、富を致し榮譽を博し、至勵を奏するを得可からざれば也。

看よ蓋世の英雄、倒海の豪傑、或は政治家、或は哲學者、其の赫々たる美名、馥郁たる芳名は海外に震動し萬邦に流布して、後吾人をして追慕措く能はざらしめたる彼の三聖を始め、ナボレオン、ネルソン、若しくば楠廷尉、豊太閤の如き、豈また三面六臂ならんや。横目堅鼻、總て吾人と同一の人間のみ。其の能く斯の如くなるや即ち巍峨たる峻山を踰へ、悲風慘雨を凌ぎ、非常の忍耐と熱心とを以て始めて此の大名を致したるのみ。若し彼の人にして安逸を事とし、遊惰に溺れ、一敗氣撓み、再折志挫け、半途にして其志を轉せんか。到底其の榮譽を得べからざるや、燎々たり。然るに世上往々行路の難に慄き、其の事業を放擲する者あり。此等の如きは自らナボレオンたり、豊太閤たるを好まざるものなり。寡慾も亦た甚だしからずや。

吾等須らく確乎不拔の志氣を涵養し、卓犖不羈の氣力を鼓舞し、勇往邁進せよ。然らば前途巍々たる山は忽ち榮の山となり、眇茫たる海は忽ち譽の海となり、慘々たる風雨は靜穩に歸し、幸福一として得られざ

る無きに至らん。實に我等の前途は壯なり、何ぞ夫れ勉めざる。(終)

永生あるを期せよ

第二學年 布本義道

人此の地球上に活動し得る間を人生の生命と云ふべきなり、僅に五十年の短日月を終へて萬事休すと云ふものは是れ大なる誤と云ふべし知らずや人生の二方面を一は即ち地球上に浮世を送る間、一は死後の生命所謂永生なり。

然らば死後の生命とは如何なるものなりや言を換へて云へば死後の事業なり、考へよ彼の佛教ある所大聖釋迦あるに非ずや即ち佛教信徒の生命は釋迦死後の生命にして其の信徒の事業は釋迦死後の事業也。又耶蘇教信徒の生命及事業は基督死後の生命及事業なり。

此の地球上の生命は際限ありて死後の生命は無限なり、此の永生あるものを聖なる人といふ、即ち凡人は死すと共に其名消滅するに非ずや、世人は死の悲むべきを知りて樂しみあるを知らざるなり、理なりこそは小人の常にして其の本領を顯はせること、死は歴史の大成にして永生の初紀なり、唯死して悲むべきは永生なきなり、夫れ事業ありて初めて永生あり、永生は幾多の忠臣傑士を作るものなり、例へば廣瀬武夫等然り武夫初め海軍兵學校に學び業卒へて海軍中佐に累進し日清の役に旅順港口堵塞の役に從ふ事二度に

して遂に戦死せし也、嗚呼中佐生きては三軍の威震する所となり、死しては尊敬せられて軍神となりけり又日露戰爭當時將士の死を視る事歸する如く思へり、今や其の戦は止みたり、旅順の山の平なる時遼東の河水の涸るゝ秋もあらん。されど報國盡忠の爲め戦死したる幾萬かの忠士の功績は長しへに青史を照すならん、あゝ人生賴もしきは永生なる哉、人生喜んで死の試験を受くべきなり、死の試験に就くの悲しさは身の不勉強に依るなり勉むべき哉、人生今日の學生目前の學科の試験にのみ離齋し最後の大試験あるを知るもの有るや否や、生あるものは必ず死す理を知り乍ら最後の大試験を知らざるは此れ愚なりと云ふべし。人生目的多し、然れども最後の目的は死なり。宗教は死の悟りの教なり。聞く楠公は非常なる宗教家なりと、是れ彼が宗教に因みて永世を覺り死を歸るが如く思ひて、永生の爲めに一身を犠牲に供せしならん、世には長く名を残さんがため墓標を大にせるもの數々あり、何ぞ愚の甚だしきや、夫れ墓標如何に壯なりと雖も一人として顧るなきを奈何せん、斯の如きは決して永生に非らざるなり、眞の永生は釋迦耶蘇楠公孔子等の如き事業に因みて得るなりあゝ浮世五十の星霜は人の暗所より出でゝ暗所に入る渡津なり、此處に臨みて告ぐ。

四百の健兒よ諸君は勉勵して最後の大試験に優等にて及第せん事を期せよ！



十二箇月

第五學年 岩崎甲藏

一月 瞳月とも云ふ。相睦ぶの謂なるべし。
元日は昨日に變りて人の心いとうれし。

萬物皆瑞氣に満ちて憂なし。天皇陛下には清涼殿に出でまして四方を拜し寶祚の萬歳を祈らせ給ふ「新玉の年の始めのことほき」の挨拶、新年の祝宴、屠蘇の香萬歳の鼓、紙鳶揚ぐる野童、羽子つく村娘、此日元日の景色なり。

家々に入れば御鏡とて大いなる餅の三寶に飾られたる又樂し
學生のかるたはこの月の景物なるべし。

二日は初賣とて商家は目廻る程忙し。

景品あるとて夜を通して初買せんとする人あるもおかし。

春の七草は、芹、薺、御形、佛座、菘、淵白、鷄腸草なるべし。

六日は小寒の入り。この日より寒氣一入嚴し。枯れ残りたる道邊の草木など夜は嵐に、朝は氷に綠も消え失せんばかり、いと哀れなり。

廿一日大寒の入り、この日より一二週酷寒の至りなり。朝な朝な軒邊に下る氷柱の劍、身を刺す如し寒星。冬の空ほど晴るゝはなし、夜嵐は星も吹き墜されそなり。

オリオン庭の七大星、シリウス、カベリン等の閃々と天空に輝ける、寒さも一入増して立つ足も地に凍りつきそう、道通ふ人の屐齒、金石の響なして歎うづく。

福壽草も早きはこの月の初旬に笑みて、愛でたくしほらしきものなり。

寒菊、寒牡丹、水仙等皆この月の景物、寒椿の雪かくれに赤く咲き出でたるも哀れなり。

二月 如月とも云ふ。衣更着の畧なるべし。

四日、せつ分、立春とも云ふこの日より春めくべし、豆を撒きて「福は内鬼は外」と、奴鳴るものこの夜なり

十一日、紀元節「雲に聳ゆる」を歌うては、神武の帝、橿原の宮に都し給ひし二千五百七十有餘年の

古へを思ふ。

閏年は二十九日。

この月の終り頃には梅も南枝より一輪二輪咲きそめ、落の臺も土手、田の畔等に萌に出で春霞催して鶯歌ひ、綠を失ひし草木も次第々々にめくまんとす。

この月の下旬より二月にかけての雪は、下駄の趾より二の字になりて消え行くものなり。

三月 彌生、草木いよいよ生ひ茂ればなり。

三日は上巳の節句さて蓬餅、白酒などを供へ女の子は雛祭をなす。

時々降雪ありて寒氣頓に増すことありて「春たちしどは名のみにて」と、かこつ人などあり。六日は啓蟄にして春雨しどく催してひきがへるの「クク」と鳴く夜もこの頃、日當りよき所は土筆、すみれ等咲き初む。

老母の様側に出で、古着つゝるも見ぬ、側に猫の目を細うし寝れるも見ゆ。

二十一日は春分にして彼岸坊主の「オー」「オー」の聲八釜し。

この月の下旬には諸學校の卒業式行はる、學生の吉日か將た厄日か?

柳も芽をふき、春風にゆられて、川も次第に兩岸の草木茂りて賑ひ出さんとす。
彼岸櫻、もくれん、こぶし等は此月の景物なり。

四月 卯月、卯の花咲く月なればと。

吹く風長閑に人の心も浮き立つ時なれば、花見、摘草とて霞める野に山に出つる人多し。

潮干狩とて静けさ海邊に蛤拾ふ人もあり。

菜の花はこの月真盛りなり、黃金世界とも怪しまる。田舎の右も左も菜の花許りと云ふ畠道を歩いて日暮るゝ時は、狐に魅まるゝとぞ云ふ云々。

諸學校の新學期始まりて學生のいと樂しき月なり、本屋の繁昌月なり。

蕨摘みて樹蔭に横はり綠の夢見るもこの月。

五月 早月、早苗月の畧なりといふ。

藤の花、躑躅の花、牡丹の花、遅き花も續々と咲き出づ。

二日は八十八夜とて稻の苗一寸許り伸ぶる頃なり。農夫も追々田に出で、耕作に忙はし。

蛙の「オレキレキ」と鳴きて八釜しきもこの頃。

六日端午の節句、軒端に菖蒲を挿し鯉の幟を立つる家多し。

此月の終り頃ともなれば春も次第に老いて、人は蝶と戯れし百花一時に跡を絶ちて、若葉、青葉伸びに伸び、梅子の葉がぐれに日々に、生ひゆく、世の辛酸を嘗むるに似て悲し。「村々皆縁に埋れ芦伸びて河狹うなりぬ」の句を誦して満面蒼茫たる暮春の野に立つ時は、忽ち堪え兼ねるが如き悲哀の情胸

に満ちて裂けんとす。嗚呼蒼々たる暮春の野！綠の世界なる哉春の暮れ！世を厭ふ者、氣るも亦宜なり。

杜鵑なくもこの頃「夜深うして四隣寂たる處、忽ち聞く杜鵑の聲、巻を抛ち起つて窓戸を開けば、千里雲晴れて月一痕」の句又哀し。

六月 水無月、水の月の義にして田ごとに水を湛ふればなりと。

十一日頃は入梅この日より陰雨連日心苦し物皆微びを生じて陰氣遣るべからず。

二十日は夏至とて晝の間、年中最も長し

七月 文月とも云ふ。

この月の初旬より霖雨晴れて心地よし。是か非か天氣晴るゝは好ましけれど、日々に募る暑氣災日赫々と直射して、金をも石をも熔かさんとす。

二十日頃より土用に入り二三週の間、酷熱其極に達す。身體困憊して人は唯木陰に據り瀧の音を聞きて漸く息を繋ぐ。

この頃の蟬の音、事の外騒々しく、汗をかける人々に尙も汗をしばらするいと憎し。

野を歩み田圃の畦を通ふ時、炎日頭をこがし、風さへなきは中々につらし。

十六日盂蘭盆といひて、松明を燃やして、祖先の精靈を祀る。

夏菊、百合、蚊遣火、行水等は、いづれもこの月の景物なるべし

高等學校の入學試験はこの月の中旬に施行せらる炎暑の候、唯木陰に憩ふのみにても、心苦しき折から三四時間もぶつ通しに、試験場に押込めらる、さても學生にも厄月なるべし。

八月 葉月とも云ふ。

永々と領を引きて待ちし土用休は愈々この月なれば、學生の正月なるべし。福月なるべし。されど休息の日記、宿題なんぞいふものは、中々に厄介物にこそ。

朝顔、蓮、鳳仙花、風鈴はこの月の景物。

西瓜に胡瓜、大好物の續々と出づる月。

朝の朝顔、夕の夕顔と、水に水とはこの頃の涼しきものなれども、其他のものは皆暑きものなり。

七日は立秋。秋の氣今日より立つべし。

この月の終りとなれば、日晝は炎熱焼くが如くなれども、朝夕に冷氣催して天地次第に秋に入らんとす。

夜は滿月、この月滿月は、陰曆七月十五日の名月にして望殊に佳なり。

蜩蟬の「カナカナ／＼」

法師蟬の「ツクト／＼」(考へて見ると長の月日鳴いて暮して何も爲なんだ)(嗚呼)オシイツクト／＼オシイ

蟋蟀の「ツヤレツグ、ツヤレツグツグ／＼」の聲何んぞ夫れ哀しきや。誰かこの音を聞きて秋を思はざる。

九月 長月とも云ふ。

一日二百十日とて農夫の厄日也。二月四日の節分(春分)より計ふるなるべし。

九日 重陽。菊の節句なり。

秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる

白露地に満ち空次第に澄み渡る。是皆秋の景色なり。

秋の七草は山上憶良か歌に盡せり。

秋の野に咲きたる花をおよびおりかきかぞふれば七種の花

萩が花、尾花、葛花、撫子花、又女郎花、藤袴、朝顔の花

この期節になれば、名もなき草木まで實を結ぶ。

或は赤に、或は紫に、或は橙に、其色とりぐにうるはし。

梨、葡萄、林檎等の果物續々出づ。

二十四日 秋分。晝夜平分の日なり。この頃よりいと凌ぎよし。

十月 小春ともいふ。昔大物主神、八十萬の神を率ひて天に上り給へば神無月とも云ふ。

野菊、芙蓉、秋海棠、コスモス、松茸、栗等はこの月の景物なるべし。

この月中頃より冷氣稍深く、木々紅葉初む。

秋の景色最も佳なれば、野に山に遊ぶ人多し。

十一月 霜月とも云ふ。

二三の挨拶語を並べて、この月の景色を云はん。

梧桐の一葉苔深き庭に落ちて、秋の行方を知らせ顔に候

秋もやうく、菊、紅葉におし移り申候。

萩も菊も野分に散されて、紅葉褪せて哀れ深き頃

「奥山に紅葉ふみ分け鳴く鹿の聲聞く時ぞ秋はかなしき」

の一句心痛ましく御座候

秋老いて膚寒き月、もす、ほゝじろ、山から等八釜敷囃つる月。

この月の終り頃より木の葉落ち初め、木々瘦せて骨のみとなる。

十二月 師走、年果つの畧轉かと云はる。

南天、硃砂根(まんりやう)の實珊瑚珠の如し。

千鳥、おしどり、時雨はこの月の景物。

二十二日冬至 夜間最も長し。

二十五日クリスマス。

餅搗、煤拂、節期拂、歳暮の贈答、仲々に忙はし。

時雨の聲いとあはたゞしく此の年も暮れ行くか嗚呼。

終りにのぞんで

第五學年 橋口敏雄

光陰は矢の如し自分が當校へ入學したのは早五星霜の昔となつた。自分は其當時は實に小供であつたのである。二百人程の入學志願の中で百八人の合格者中の第三十六番と云ふ終りでもないが餘り上でもなかつたが併し其の當時は實にうれしかつたまるで鬼の首を取つたかの様で少し自分の鼻が高くなつたかの様に思つた。今から思へば笑止の至りである、當時當校には先輩の石川君塚本君等の豪傑らしい人があつて自分は此等の先輩に禮を失した爲に途中でいちめられた殊に藤田五十若君とか云ふ豪傑には手をねぢられたりけられたりしたそれでもう四年生五年生と云ふと大きな人恐ろしい人とばかり思ふて居た。

又一年級の最初の試験等は不馴れたため隨分弱らせられたが、幸にして失敗もなく二年三年四年と修業して今日となつて又五年級と云ふ一年の生徒より恐れらるゝ人となつたかと思ふと何となく自分の責任のな

い輕卒なやり方がたよくなくなつたのである、と思つて居る間は一、二學期も過ぎて早や三月近くなつて受験準備に急がはしい身となつたのである。

思へば人間も中々變り易い早いものである。

扱て自分は此の五年間隨分多くの事に出会つたそしして多少経験も得たのである。又多少の事をれば悟つたのである、其中で最も感じたのは次の様な事なのである、生徒の中ではよく勉強するものがあれば、あゝあれは點取りじやあんなにしなくとも自分で實力さへあれば充分なのであると云ふ生徒が多いのである、夫はそうかも知らんが此實力と云ふものは實際勉強しなくては得られぬのである、一體物をなすには其目的がなくてはならぬで之あるためにつとめきばるので遂に成功するのである、それで又生徒でも此點を取りたいと云ふ考へがあればこそよいのである。

其故は其取を多くとらんがためには非常に勉強せねばならぬのである、其一方より云へば此點を多くとらんと云ふ事は賤しかも知らぬが其少しでも多く點を取らんと苦しんで非常なる勉強してをる間に知らず識らず實力が其身に付て行くのである其少しでも點をとらんがため少しで良く勉強して良成績を得んとするのは必ずしも受験の爲めに入室の場合其途中及び戸際甚しきは教室内迄本或は筆記を見ると云ふ事や試験中不正の行爲をしてまでも少しでも多く點を取らんと云ふのではない此邊は良く考へて決して誤解してはなんのである。